

INTERVIEW

山形県立河北病院 内科(総合診療)
深瀬 龍先生



地域医療の魂をつなげていきたい

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

小児科医になりたかった

山田隆司(聞き手) 今日は山形県立河北病院に深瀬龍先生をお訪ねしました。先生は今年のへき地・地域医療学会で高久賞を受賞されました。まずはおめでとうございます。毎年高久賞に応募していらっしゃる先生たちの作品は優劣付けがたいものがあります。中でも先生の発表は素晴らしく、印象深いものがありました。今回受賞者ということで先生のインタビューをさせていただくことになりました。

深瀬 龍 ありがとうございます。

山田 まず、先生のこれまでの経歴を簡単に紹介してください。先生は自治医科大学卒業生二世ということですよね。その辺りもお話しいただけ

ますか。

深瀬 自分の年代ぐらいから二世が出つつあると思います。父親の義務年限の派遣中に、官舎から医局に「ご飯ができたよー」と父親を呼びに行くのが、物心ついた自分の最初の記憶です。入学して5年生の地域実習のときに、父が赴任していた病院に実習に行く機会があり、その際に過去の記憶と同じ風景が見えてとても感動しました。

山田 それはどこの病院ですか。

深瀬 以前の八幡町立病院です。現在は日本海八幡クリニックになりましたが、もともと自治医大に行きたいと思っていたわけではなく、浪人し

てたまたま自治医大に受かったから行ったという感じだったのですが、その学生時代の地域実習で自治医大という文脈が近くなった気がしました。

山田 でも医師を目指そうと思ったのは、お父さんの影響があったということでしょうね。

深瀬 そうですね。でも自分は子どものための医療がしたくて医者を目指しました。だから自治医大の説明会のときにも、「義務年限があっても小児科医になれますか？」と質問しました。今の言葉で言えば、専門志向が強かったのではないかと思います。

山田 学生時代はそれが普通だと思いますよ。

深瀬 自分の父親が消化器専門医でその背中を見ていたので、医者とは専門ありきだと思っていたのですね。でも自分は実は東北初の二世、全国初留年した二世で(笑)、当時は父親と母親に顔

向けできませんでした。

山田 何年生で留年したのですか。

深瀬 1年生のときに物理ができなくて(笑)。

山田 それは珍しいね(笑)。

深瀬 「物理で留年する人間は10年に1人いないよ」と、物理の先生に言われました。で、そこから何とか卒業できて医師になったわけですが、やはり小児科医になりたいと思っていました。ところが県立中央病院での初期研修2年目にターニングポイントがありました。酸素投与が必要な誤嚥性肺炎の患者さんが運ばれてきて、どこの科も受け入れてくれなくて困っていたときに、県中の自治医大の先輩が「困っているなら救急だ」と言って受け入れてくれたのです。困っているときに手を挙げられるのはすごいと感じ、「何でも診るって格好いい!」と思うようになりました。

総合診療に傾倒する

深瀬 3年目から義務年限の地域派遣に入り、小児科と総合診療で気持ちが揺れていたのですが、一度田舎を見てこようと思って、最上町立最上病院に2年間行きました。そこは本当に楽しかったです。何が楽しかったって、町には少なからず子どもがいて、その子どもがアクセスしてきて、不登校の子や起立性調節障害の子などを自分の外来で診て、何とか学校に行けるようにしたといった経験ができたことです。地域医療の中に自分のやりたい小児科が内包されていると気付いたのですね。

山田 町立病院の病床数は？

深瀬 50床で医師は5人体制で、全員内科でした。

山田 自治医大の卒業生は？

深瀬 私一人でした。でも自治医大卒業生が必ず派遣されていた病院です。

山田 外科がなくて手術はしないけれど、内科の入院や、外来では小児を含めて幅広く診たわけですね。

深瀬 はい、子どものワクチンも打ち、内視鏡もやり、検診もやり、在宅もやり、何でも診るといった感じでしたね。

山田 最上町の人口はどのくらいでしたか。

深瀬 9千人ぐらいですね。医療機関は開業のク